

対談

地域循環共生圏 (ローカルSDGs) の具現化

2018年4月に閣議決定された第五次環境基本計画にて、「地域循環共生圏（以下、共生圏）」が提唱されました。

翌年からスタートした環境省事業「環境で地方を元気にする地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業」は3年目を迎えています。

政策として提唱された地域循環共生圏というコンセプトが地域で少しずつ創造されつつあります。そこで今回の対談では、共生圏の創造・具現化とはどのようなものか、また地域循環共生圏づくりのポイント等について改めて考える機会とし、お2人の識者に登壇いただきました。

聞き手：地球環境パートナーシッププラザ 江口健介 編集・採録：つな環編集部



渡邊 直樹氏
Watanabe Naoki



杉山 泰彦氏
Sugiyama Yasuhiko

地域を「変える」ではなく 「幸せ」を持続させる

江口：地域循環共生圏づくりを長野県根羽村（ねばむら）という現場で取り組まれている杉山さん、そして全国各地の地方創生の取組を取材されてきた渡邊さんと、さまざまな視点から地域循環共生圏の実現について考えます。

渡邊：「地域人」という雑誌の編集長をしています。2021年の9月発売号で「地域人」は創刊6周年になりました。その号の特集が「世界自然遺産の保全と地域の活性化」（第73号）で、奄美大島、徳之島、沖縄島北部（やんばる）、西表島を取材しました。この号の内容については後ほどお話ししたいと思います。

「地域人」は2015年の創刊で、その1年前に設立した大正大学地域構想研究所で編集しています。2016年には同大学内に地方創生に貢献する人材を育成する「地域創生学部」も創設されました。「地域人」のキャッチコピーは「地に生きる、地を生かす」です。地域を元気にしている人たちにエールを送るとともに、そういう人材育成のための教材という役割も担っています。

杉山：私は、株式会社WHEREという東京の会社に籍がありますが、同時に昨年、根羽村役場の実行組織として「一般社団法人ねばのもり」を立ち上げ、その代表理事も務めています。

WHEREは地域を支援する企業で、ウェブメディアを持っていたり、地方に移住したい人のコミュニティを作ったり、東京に地方とマッチングするようなハブ的役割を行っています。そのクライアントの1つの根羽村の暮らしに惚れて、2018年に移住しました。同時に総務省の「地域おこし企業人」という制度を使い、村役場の総務課にも籍を持ち、地域全体のプロモーションの担当や、それを生かした事業づくりも行っています。「ねばのもり」もその一環です。

根羽村は長野県の最西南端にあり、人口が約900人、村の9割が森です。村民全員が森林組合員という林業の町です。一方で、高齢化が50%を超え、人口が全



ネバーフォレストプロジェクトでは、「根羽すぎ住宅」も開発

盛期の1／3になっている、典型的な過疎の山村の1つです。

森は、ある種の資本主義社会の象徴といえます。大量生産・大量消費の社会で外材が入ってきて、国産木材は価格が急落し、使われなくなりました。森には木材を提供する以外にも、水を守ったり、土砂災害を防ぐなどの環境的な機能があります。だから気候変動が起きている今、森の保全に取り組んでいなければいけない、でもお金はない、人もいなくなってきた、どうしよう…というのが、現在の日本の森の問題で、根羽村はまさにそれを抱えています。

そこで僕らは、その目の前の問題自体に取り組みながら次の世代に繋げる「ネバーフォレストプロジェクト」というコンセプトを掲げ、いろんな取組を行っています。

江口：まさに今回のテーマである地域循環共生圏の具体的な姿が見えそうです。「地域人」の第49号「SDGs×地域創生」では地域循環共生圏の特集をしていただ

いていますね。

渡邊：この号は4周年記念号でしたが、その時期に雑誌としてSDGsを特集のテーマに取り上げるのは早かったと思います。特集では、はじめに元環境事務次官の森本英香さんにお話を伺いました。環境省が作成した、通称「曼荼羅」と呼ばれる地



『地域人』第49号「SDGs×地域創生」

用語解説

地域循環共生圏

各地域が美しい自然景観等の地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、地域の活力が最大限に発揮されることを目指す考え方。2018年4月に閣議決定された第五次環境基本計画にて提唱された。

域循環共生圏の全体イメージ図を見たときに、これからの地域、日本、地球が中長期的に目指す方向はこれだと確信し、その図もふくめて大きく取り上げることにしました。

「地域人」のロゴを見て頂きたいのですが、創刊の頃は「地域人」ではなく、「地球人（ちきゅうじん）」ですか？」といわれることが多かったのです（笑）。でも、この号が出る頃には、それもあながち間違いではないと思うようになっていました。「地域」の将来の在り方を考えることと「地球」の未来を考えることには連続性がある、通じ合うものであるからです。また、「地域」と「地球」の間には日本という国の存在もあるわけですね。自然と共生してきた日本人の自然観には、地球環境を守ろうというSDGsをリードしていける思想が根底に流れているわけです。そのことを私たち日本人自身も再認識すべきではないかと思っていたので、このような特集として結実したわけです。

江口：持続不可能という地球規模の課題に対して、地域にヒントがあるというご指摘ですね。杉山さんが「地域」「地球」の視点を持ちつつ地域循環共生圏づくり

をされている立場から、感じられたことなどをお聞かせください。

杉山：森は社会全体の課題の象徴でもあります。根羽村には「森を通じて水を守る」という考えがあり、そのような環境問題を起点とした地域循環共生圏づくりはしやすいと思います。ただその中で、地域の人がどれだけ意識を持って取り組んでいるかが大事なので、自分たちの暮らしにいかに関与するかに注力しています。一度、地元の20代～30代の方にヒアリングをしたことがあるのですが、「いろいろ不満はあれど、幸せ」という、暮らす上で根羽村は自然が豊かでとてもいいよね、という意見が非常に多かった。地域の人を巻き込む時に、「変えていこう」というよりは、「この幸せをどう持続していこう」、という言葉の方が響いたりするんですよね。その目線合わせはかなり意識してきたように思います。

新しい「祭り」が地域を活気づける

渡邊：根羽村には、杉山さんと同世代の若い方が移住



曼茶羅とよばれる、地域循環共生圏のイメージ図

出典：ウェブサイト「環境省ローカルSDGs」 <http://chiikijunkan.env.go.jp/shiru/>

してきた人はどのぐらいいらっしゃるんですか？

杉山：今、高齢化率が54%なので、65歳以上が400人以上いて、僕が移住してきた時には18歳から40歳が住民票上で100人、その中で実際に住んでいたのは70人ぐらいですね。そこから、移住者は子供も含めて50～60人ぐらい増えたと思います。

渡邊：それはすごい。これからが楽しみです。

杉山：そして移住者と地元の人はかなり融合しているように感じます。こちらに移住する前にいろいろな地域を見てきましたが、移住者コミュニティだけで盛り上がっていることが多かった。でも、僕の中では、地域の外の人と中の人が融合していくことが理想だと意識していました。根羽村役場に地元出身の30代の方が5～6人いらっしゃって、地元をよくしていこうと頑張っているのが、環境的にも恵まれていたように思います。

渡邊：村役場では、移住してきた人も働かれていますか？

杉山：そうですね、今は役場職員の4割から5割ほどが村外出身者になっていると思います。

渡邊：皆さんそれぞれのスキルをお持ちなのですか。

杉山：プレイヤーは多種多様な人が増えてきました。木工作家もいれば、ジビエの調理師免許を持っている人もいたり、山の中で牛を飼う酪農家も。YouTuberもいます。

江口：「移住者と地元の人の融合」についてお2人はどう考えていますか。

渡邊：「地域人」を始めたころは、移住者が地域に駆け込むためには、消防団の活動とお祭りへの参加が大事だとよく言われていました。今では、地域の昔ながらの伝統も守りつつ、同時に移住者が持ち込んだラップ大会といった新たなイベントも一緒にやって盛り上がる、というような話を聞くようになって、それはいいことだなと思います。「地域人」でも『「新しい祭り」が地域を活気づける』（57号）という特集も組んだのですが、この号のすぐ後に新型コロナウイルスの感染が拡大し、そういったイベントが一切できなくなってしまいました。コロナはいまだに今後どうなるかわかりませんが、新しい形も含めてお祭りやイベントは、地域の絆を強くするうえでも観光客を集めるためにも大事であることは変わらないでしょうね。

杉山：根羽村では、新しいお祭りごとやイベントができるイベントスペースを作ったのですが、先日はそこ



根羽村でのハロウィンの様子

でハロウィンをやりました。村の子どもたちがみんな仮装して地域の商店を回り、トリック・オア・トリートを楽しんで、お菓子をもらいました。その時、村内の約半分の子どもが参加して、村の活気はすごかったですよ。

江口：渡邊さんにお伺いしたいのですが、外部からの視点で見て、こういう地域いいなあ、深く関わりたいなあ、と思う地域にはどんな共通点がありますか？

渡邊：良いと思う地域を訪れてみると、「地域人」だったら、いろいろな特集で紹介できるなと思うんですよ。例えば、兵庫県豊岡市。劇作家の平田オリザさんが中心となり前市長の中貝さんと、演劇による町おこしをされました。豊岡には古くから文人たちも訪れた温泉街「城崎温泉」もありますが、そこでは、ひとつの旅館の中にお客様を抱え込むのではなく、浴衣姿でまちを散策し、温泉施設を回遊して楽しんでいて、まち全体が潤うようにしています。ですから、アートによる町おこしの特集もできるし、温泉の特集もできる。また最近ではジェンダー平等にも力を入れています。

山形県の鶴岡市も良いですね。昔から文化的にも豊かな土地ですし、食も豊か。山形大学の江頭宏昌先生は地域の伝統野菜を復活させて、それをイタリアンの奥田シェフと組んで、全国からわざわざお客様が集まるレストランもあるし、全国に伝統野菜の再発見を伝道しています。自治体と大学そしてビジネスのパートナーシップがうまく展開していると思います。ほかにもいくつもありますが、共通しているのは、まずは自分の住む土地に対しての愛と誇りを持ち、その土地の価値を新たな視点で発見して、現代にあうようにうまくアレンジしている。そういう試みをしている地域には、1つだけでなく複数の魅力が生まれてきます。



YouTube「NEBA 長野県根羽村公式チャンネル」に掲載されている動画、「とあるねばの」シリーズ

自分の村を知ることによって愛が深まり、多様性が生まれる

杉山：僕も地域への愛とか誇りって、本当に大事だと思っています。私が関わり始めた頃から根羽村は人口が増しているのですが、実は広告費はかけていないんです。その代わりに村内広報に力を入れて、地域の熱量が上がりました。その熱量に惹かれて、移住する人が増えたんじゃないかと思います。

根羽村には村内にしか流れていないケーブルテレビ局があります。そこで、移住してきたプロのカメラマンの力を借りて、村の中の生活をドキュメンタリー風に撮るシリーズを始めました。例えば、村の運動会や小学生のマラソン大会、おじいちゃん・おばあちゃんの行事ごと、地区のお祭りなど、この1年で25本ほど撮りました。そういうものを村の人たち自身が見ると、「私たちの村っていいなあ」と、改めて思えるようになったりするんですよね。自分たちの村について知らないから、愛が生まれなかった。逆にそれを作っていくと、「自分も何か挑戦したい」という人が増えてきた。そうすると、豊岡市や鶴岡市のような地域に見られる「多様性」が生まれてくるんですよね。その幅に惹かれて、移住したいという人が増えてくる。そんな構造が根羽村でも生まれています。

渡邊：メディアで活躍するには、かつては映画会社、テレビ局、出版社、広告代理店などに入社してスキルをマスターしなくてはならなかった。でなければ、映画も撮れないし出版もできなかった。ところが今はPCやスマホ、デジタル機材が発達し、ネット環境が整備され、その気になれば誰もが映像作家、編集者、作家、クリエイターになって世界に向けて発信できるようになりました。Youtuberのように自分が出演できる喜びもある（笑）。

「地域人」はこれまでも、地域在住のジャーナリスト、カメラマン、映像作家、地域活動家、編集者、アーティストたちに参加してもらい、その地域を特集することを、2～3回やってきたんですが、来年からは企画段階から参加してもらい、隔月くらいで地域特集をつくっていかうかなと考えているところです。地域の広報だって、何も高いお金を払って東京の大手広告代理店などに制作してもらうことはないわけですよ。自分たちで作ったほうが面白いものもできる。今、テレビでも面白いのは、タレントさんより素人が出てくる番組です。その人となり魅力的だし、方言も素敵だし、何気ない風景も美しい。もちろん、上手に編集されているんですけどね。

杉山：そういう素人が日常的にやっていることの面白さが、外の人と持続的に繋がる上で大事だと思っています。それは地域循環共生圏を考える時も同じだと思います。地域を本気で変えていくには、5年、10年、もしかしたら100年かかるかもしれない。そんなロングスパンでも繋がれる、無理のない関係性が必要だと思います。

渡邊：持続可能性ということを考えると、やはり経済的自立がないとできない。そこをどうするかが大きなテーマですね。

杉山：そうですね。根羽村も、現在まさにそのフェーズです。僕もちょうど来年3月で「地域おこし企業人」としての期間が終わりますが、この3年で作ってきた地域の誇りとか資源を、地域のプレイヤー自身が享受できるような経済圏をどうしたら構築できるか考えています。移住相談も、かつては田舎暮らしをしたいとか、子どもを自然の中で育てたいとか、そういう意思を持つ移住が多かったんですけど、今は「地域を作る側」のポジションでやりたいという人が増えてきています。そうした人たちを繋いだりする、今まで僕が担ってきた役割ができる人材として、根羽村職員を公募しています。

良い地域には、地道に活動し続けた人物がいる

江口：渡邊さんの中で、これは！という行政の人物はいらっしゃいますか。

渡邊：たくさんいらっしゃいますが、地方の首長さんで印象に残っているのは、「森林は生きているか？」

特集（第34号）でインタビューした長野県伊那市の白鳥孝（しろとり・たかし）市長。非常にアイデアマンで、民間企業から面白い人材を採用したり、市の予算を使わずに外から参加する人たちが参加費を払っても喜んでやってくるようなイベントを考えて、地域を良くするようなことをされています。ドローンの実証実験も、山と川の多い伊那にこそ向いているといっ、早くからされていましたね。

杉山：今、役場にプロ人材を入れるという動きが全国で増え始めていて、奈良県生駒市や長野県塩尻市など、民間の人に副業的に入ってもらい役割を渡していますが、そういう事例はもっと増えてもいいですね。

江口：これまでのお話の中でも出ていますが、地域外とのパートナーシップをどうするべきか、そして地域循環共生圏を日本社会の中で増やすためにはどういうことがポイントになるのでしょうか。

渡邊：冒頭でも触れた第73号で、私はやんばると西表島取材したんですが、地域の固有種、絶滅危惧種、生物多様性を守るために、長年に渡って情熱を燃やしながら地道に活動してきた人たちと会ってきました。その活動を地域から沖縄県にそして国に広げるために動いた人も魅力的でした。地域のタカラを守りながらいかに経済活動も盛んにするか、そのための観光のあり方を様々なステークホルダーが集まり考え、実践しています。彼らが共通して語るのは世界自然遺産はゴールではない、「これからだ」と。信頼の上に構築した繋がりを活かして、これからいかに「環境保全」と「地域の活性化」を両立させるか、未来を見据えています。地域の資源をいつくしみ、それを自分たちで考え、地域から県や国を動かし、世界から観光客を集める新しい観光のありかたを考え、展開しようとしています。中央から与えられるものをこなしていくのではなく、多くの地域がこのようなベクトルで動いていくことが大事だと思います。

杉山：僕は「自分の言葉になっている」ことが重要だと思っています。今、世の中ではSDGs、持続可能などとよく言われていますが、それが自分の中でどこが腑に落ちるポイントなのか、しっかりと捉えることが大事だと思います。

僕はSDGsをやっているという意識はなくて。自分が住んでいる根羽村が、住む上で良い場所だったり、楽しかったりしてほしいなあと思っ、そこが原点です。それを自分の言葉にできるかどうか、



出典：地域人 第73号 「世界自然遺産の保全と地域の活性化」

地域内外での繋がりを作る上でも大事だと思います。

江口：地域循環共生圏の具現化という点でとても示唆に富んだ内容だったと思います。最後に、一言ずつお願いいたします。

渡邊：今回、杉山さんのように、地域内から問題に取り組んで解決していこうとしている若い方とお話をすることができてとても嬉しいです。未来に少し光が見えてくるようです。「地域人」もこれまでは地域に取材に行き、地域活性化の事例を誌面で紹介してきましたが、来年からの「地域人」は、地域の活性化にもう少し関わっていけるように、元気な誌面をお送りしたいと思っています。

杉山：僕は難しいことを意識していなくて、村の中で取り組むべきことのバランスと、人をしっかりと見ていながら進めていくことが、地域循環共生圏の具現化に繋がると考えています。

渡邊直樹（わたなべ なおき）

月刊『地域人』編集長。1951年生まれ。東京大学卒業後、平凡社で「太陽」を編集。その後、「SPA!」「週刊アスキー」「婦人公論」などの編集長を歴任。2004年より大正大学教授。その間も「をちこち」（国際交流基金）、「宗教と現代がわかる本」の編集長を兼務。2015年より現職。

杉山泰彦（すぎやま やすひこ）

長野県根羽村 村民／一般社団法人ねばのもり 代表理事／株式会社WHERE 地域プロデューサー。
これまで累計20地域のプロデュースに関わり、2018年12月より自身も長野県根羽村に移住し、地域の拠点立ち上げを目指す。
2020年度まで、環境省の地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業の環境整備に取り組む。